

平成 30 年度 滝川市道徳教育推進事業 実践報告書

「自己と他者の心を見つめる

道徳科の授業の在り方」

～考え、議論する学習過程を通して～



滝川市教育委員会

滝川市道徳教育研究会議

発 刊 に あ た っ て

これからの新しい時代に向けて育成を目指す資質・能力の3つの柱（「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）をしっかりと育てていくためには、より一層学びの質を高めることが求められます。これが、新学習指導要領の趣旨であり、道徳科においても、これらの趣旨を踏まえて、他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値の理解を基に、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う学びが求められています。その学習・指導改善の視点が「考え、議論する道徳」であり、その実現を目指していく必要があります。

本市においては、子どもたちの豊かな心の育成を図るため、平成19年度から2年間は文部科学省の指定を受け、平成21年度からは、市独自に「道徳教育推進事業」を立ち上げて実践的な研究を推進してきたところです。

今年度からは、これまでの研究成果を引き続き「深める、広げる」とともに本市の道徳教育の一層の充実を図るため、3か年計画で道徳教育の要となる「道徳科の授業」に係る実践研究を推進してまいりました。今年度は7回の研究会議と実践発表会を開催し、各学校から選出された道徳教育研究員による理論研究と3校における研究授業を行いました。研究授業の中では、児童生徒が道徳的価値を自分ごととして考え、他者と議論することを通して自己の生き方についての考えを深める姿を見ることができました。

本報告書には、研究主題に基づいた研究理論・授業実践等、研究の取組の成果が掲載されております。各学校において本書が有効に活用され、子どもたちに、自己の生き方について自分なりの考えをもち、主体的に行動しようとする心が一層醸成されることを願っております。

終わりにになりますが、本研究事業の推進にあたり、ご協力いただきました研究員の先生方、関係各位に心からお礼を申しあげ、発刊にあたってのご挨拶といたします。

平成31年 3月

滝川市教育委員会教育長 山 崎 猛

目 次

発刊にあたって

第1章 研究概要

I. 研究主題及び主題設定の理由	2
II. 目指す子ども像	2
III. 研究仮説	2
IV. 研究内容	3
V. 研究の全体構造図	4
VI. 事業及び研究の進め方	5
VII. 研究推進の経過	6
VIII. 平成30年度 滝川市道徳教育研究会議 名簿	7

第2章 研究理論

I. 児童生徒の思考を深める発問の工夫	9
II. 言語活動の充実を図る指導方法の工夫	12
III. 保護者や地域の方などの支援を得た指導の工夫	15

第3章 平成30年度授業実践

・滝川市立江部乙小学校 田中このみ 教諭	18
・滝川市立滝川第二小学校 釣本浩一 教諭	24
・滝川市立江部乙中学校 川原かおる 教諭	33
・各授業実践の反省 ～各研究協議より～	41

第4章 成果と課題

・平成30年度 滝川市道徳教育推進事業 研究の成果と課題	45
------------------------------	----

参考・引用文献	57
---------	----

第 1 章

研究概要

I 研究主題及び主題設定の理由

1 研究主題

「自己と他者の心を見つめる道徳科の授業の在り方」

～考え、議論する学習過程を通して～

2 研究主題設定の理由

平成29年3月に告示された新学習指導要領において、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等、社会が加速度的に変化する新しい時代に求められる資質・能力を育むため、「社会に開かれた教育課程」の実現が示された。よりよい学校教育を通して、よりよい社会をつくるという理念のもとに、学校教育と社会教育のより密接な関わりが求められている。大きく変化し続け、予測困難な社会において、学校、家庭、地域が連携・協働して、社会総がかりで子どもを育成する仕組みづくりが重要である。

そうした中、児童生徒に生命を大切にすることや思いやりの心、倫理観や規範意識など、人間としての在り方や生き方の礎となる道徳的価値を理解させ、豊かな人間性や社会性をはぐくむ道徳教育を充実することが求められている。

とりわけ、これからの時代に、多様な人々と協働して生きる児童生徒にとって、様々な視点から他者や物事を理解し、主体的に判断し、行動することができるようになることが求められる。そのような資質・能力を身に付けることで、身のまわりの人、集団そして社会とのかかわりを大切にし、望ましい人間関係の育成を図ることができると考えられる。

児童生徒に、自立した人間として他者とともによりよく生きようとする心をはぐくむためには、生きていることの素晴らしさや喜びを味わわせ、生きがいをもたせるとともに、その在り方について主体的に自分との関わりで考え、多様な考え方や感じ方と出会い交流する体験などを通して、そのよさや意義、困難さ、多様さなどの理解を深める必要がある。

これらのことから、本研究では、研究主題を「自己と他者の心を見つめる道徳科の授業の在り方」と設定し、児童生徒が道徳的価値を自分ごととして考え、他者と議論することを通して自己の生き方についての考えを深めていくことができる道徳科授業の姿について研究をすることとした。

II 目指す子ども像

本研究では、児童生徒に、①自己の生き方について自分なりの考えをもち、主体的に判断し、行動しようとする心 ②他者を思いやり、他者との関係を大切にする心 を育成する観点から目指す子ども像を、

「自己の生き方についての考えを深め、他者とよりよい関係を築きながら行動する子ども」

と設定する。

III 研究仮説

上記の「目指す子ども像」を踏まえ、研究仮説を次のように設定した。

「道徳科の授業」において、道徳的価値の内面化を図らせながら、他者との関わりを通じて多様な見方・考えに気づかせる指導の工夫を講じるとともに、保護者や地域住民等の支援を得た指導を充実させることにより、児童生徒に自己の生き方についての考えを深め、他者とよりよい関係を築きながら行動する心をはぐくむことができるであろう。

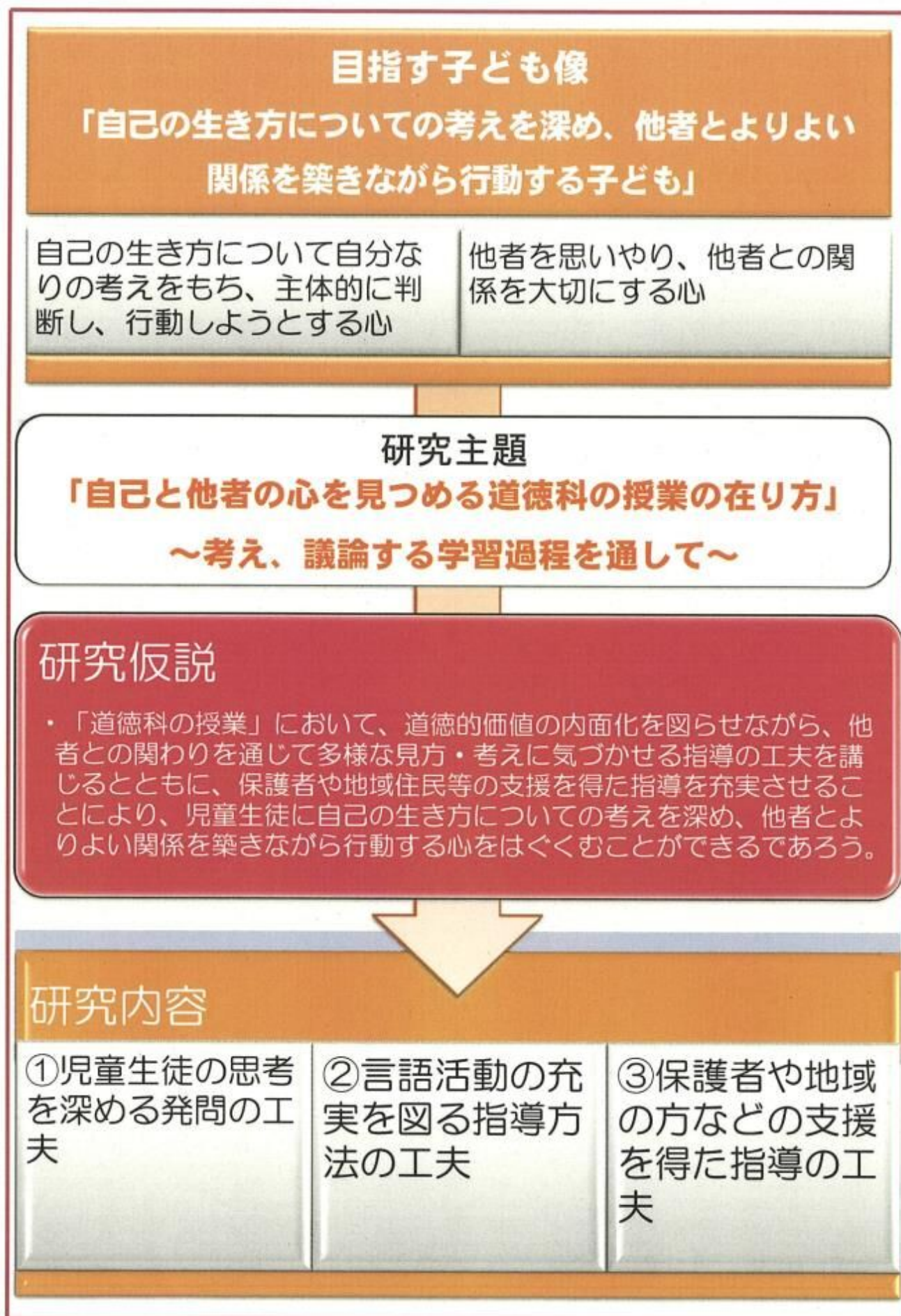
Ⅳ 研究内容

児童生徒に「自己の生き方についての考えを深め、他者とよりよい関係を築きながら行動する心」をはぐくむためには、道徳教育の要となる道徳科の授業において児童生徒が他者との関わりを通して、道徳的価値を自分ごととして捉えながら思考する学習活動を展開することが必要である。

そのためには、児童生徒の思考を深めたり、広げたりする指導過程の充実を図るとともに、児童生徒・教員・保護者そして地域の方との関わりや体験活動を意図的・計画的に教育活動に位置づけることが大切である。

そこで、研究の対象を「道徳科の授業」とし、研究内容を次のように設定した。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 児童生徒の思考を深める発問の工夫② 言語活動の充実を図る指導方法の工夫③ 保護者・地域の方などの支援を得た指導の工夫 |
|--|



Ⅵ 事業及び研究の進め方

1 事業名

滝川市道徳教育推進事業（平成30年～32年） ※3か年研究1年次

2 事業のねらい

本市が推進してきた「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業（平成19～20年度）」・「滝川市道徳教育推進事業（平成21～29年度）」の成果を「広げる・深める」ことを通して、本市における道徳教育の更なる充実に資することをねらいとする。

（1）道徳科授業の質の向上

- ・「道徳科」の授業実践の充実（アンケートの活用・効果的な発問の在り方）
- ・自己の生き方についての自覚を深める指導の工夫
- ・教材の効果的活用（「私たちの道徳」「副読本」「はーとふる」「北海道道徳教育 Web プログラム」「きたものがたり」を含む）
- ・言語活動の充実が図られる指導過程の工夫（「書く活動」と「話す活動」に関わるねらい・目的の明確化）

（2）家庭・地域と連携した道徳教育の推進

- ・保護者と連携した「子どもの心を耕す」取組の充実
- ・地域の教育力を積極的に活用した道徳教育の充実

（3）研究成果の還流・発信

- ・実践発表会の実施
- ・実践資料の各学校への配布（冊子版・DVD版）と滝川市教育委員会 HP 掲載による道徳科授業の実践内容に係る保護者や地域に向けた発信

3 事業及び研究の進め方

（1）滝川市道徳教育研究会議の設置

本事業における研究を推進するために、「滝川市道徳教育研究会議」（以下、研究会議）を設置する。

（2）研究会議は、市内小・中学校教員10名（小学校6名、中学校4名）と事務局（教育委員会職員）により構成される「滝川市道徳教育研究会議」を設置し、研究を推進する。

（3）研究会議の活動

- ①道徳科に係る理論研究を行う。
- ②授業実践を通して研究仮説の検証を図る。
- ③3年間で10校の研究授業を実施する。
※平成30年度：3校、平成31年度：3校、平成32年度：4校
- ④実践発表会を開催して研究成果を還流・発信する。また、実践資料を作成し、各学校に配布するとともに、滝川市教育委員会HPにも掲載する。
- ⑤多様な教材を用いて（「私たちの道徳」「副読本」「はーとふる」「北海道道徳教育 Web プログラム」「きたものがたり」を含む）ねらいを達成するための効果的な指導の在り方を検証する。
- ⑥道徳の特別教科化に向けた準備作業を進める。

4 平成30年度研究推進の重点（※29年度の成果と課題より）

（1）『考え、議論する道徳』の姿を明らかにする「発問の在り方」の検討

- ・児童生徒が道徳的価値を自分ごととして主体的に思考することを促す発問の在り方
- ・児童生徒に道徳的価値について積極的な交流を促す発問の在り方

（2）言語活動の充実を図る指導過程や指導方法の工夫

- ・「書く活動」と「話す活動」のねらい・目的の明確化や時間配分
- ・思考の変容をたどっていきけるようなワークシート作成・使用など、「書く活動」を通した授業内容の深化を図る工夫
- ・「話す活動」における形態（ペア、小グループなど）、手法（KJ法、シグソー法など）の検証

- (3) 学校、家庭、地域連携の要となる道徳の時間の充実
 - ・「学級通信」や「教科書」、「私たちの道徳」を活用した双方向の情報・意見交流
 - ・市内の教員への研究成果の還元
- (4) 道徳の特別教科化に向けた準備作業

5 児童生徒の変容を把握するための手だて

- ・滝川市道徳教育研究会議作成「道徳性アンケート」の授業前後実施
- ・計画的な児童生徒の観察 ・各校の自己点検、自己評価 ・感想文、ワークシート
- ・児童生徒に対するアンケート ・保護者へのアンケート
- ・自校内はもとより、学校間、校種間を超えた教師の話し合い など

6 本事業における道徳科の授業公開の実施計画

- (1) 研究会議による公開授業研究
各研究員が研究理論に基づき公開研究授業を行うことで、研究主題の具現化を図る。
- (2) コスモスデー地域一斉参観日における道徳科の授業公開
期 日：平成30年10月26日（金） 滝川市地域一斉参観日
市民に向け、市の広報で地域一斉参観日の開催を知らせ、広く授業を公開する。

7 その他

本研究では、平成31年度からの中学校における「特別の教科 道徳」本格実施に向けた情報発信、各種準備を推進する。

VII 研究推進の経過

- ・第1回研究会議（平成30年 5月15日） 研究会議結成、推進計画
- ・第2回研究会議（平成30年 6月 7日） 理論研究、アンケート及び指導案、全体計画
- ・第3回研究会議（平成30年 8月28日） 指導案検討（江部乙中）
- ・第4回研究会議（平成30年10月 2日） 授業公開及び協議（江部乙中）
指導案検討（江部乙小）
- ・第5回研究会議（平成30年10月24日） 授業公開及び協議（江部乙小）
指導案検討（滝川第二小）
全体計画、別葉様式確認（中学校）
- ・コスモスデー地域一斉参観日 各校における道徳の時間の授業公開
- ・第6回研究会議（平成30年11月22日） 授業公開及び協議（滝川第二小）
- ・第7回研究会議（平成31年 1月24日） 研究のまとめ、実践発表会に向けて
- ・第8回研究会議（平成31年 2月21日） 実践発表会
- ・「平成30年度実践報告書」の発刊（平成31年3月末）

Ⅷ 平成 30 年度 滝川市道徳教育研究会議 名簿

＜研究員＞

滝川第一小学校	春田 大介	東小学校	伊林 大介
滝川第二小学校	釣本 浩一	江陵中学校	片桐 基彰
滝川第三小学校	内野 七瀬	明苑中学校	山田 圭子
西小学校	寺 崎 希	開西中学校	今城 紗苗
江部乙小学校	田中このみ	江部乙中学校	川原かおる

＜事務局＞

滝川市教育委員会	教育部指導参事	粟 井 康 裕
滝川市教育委員会	教育総務課主査	佐 藤 憲 弘
滝川市教育委員会	教育総務課主任級主事	高 橋 絢 美

第 2 章

研究理論

I. 児童生徒の思考を深める発問の工夫

1. 児童生徒の思考を深める発問の工夫

児童生徒に自己の生き方についての考えを深め、他者とよりよい関係を築きながら行動する心をはぐくむためには、道徳科の授業において児童生徒が他者との関わりを通して、道徳的価値を自分ごととして捉えながら思考する学習活動を展開することが大切である。そうした学習活動を促す上で、「発問」の質は欠かせない要素といえる。

「発問」の質については、前3か年研究においても指導案検討や授業反省の際に研究員の間で議論となり、特に研究最終年次となる平成29年度には、授業のねらいと児童生徒の実態を踏まえた「発問」について、指導案検討段階で協議を深めてきた。そのため、昨年度公開された4本の研究授業では、それぞれ児童生徒がねらいとする道徳的価値について自分なりの考えをもち、他者と交流する活動を通して新たな見方や考え方に気づき、それを自分のこれからに結び付けて考えていく実践が行われた。その一方で、子どもの思考を深める発問の一定の「型」について、これまでの実践を整理する必要があるという課題も残された。

そのことを踏まえ、今年度は「児童生徒の思考を深める発問」の在り方について研究を進めることとした。

(1) 学習指導過程の特質に応じた発問の工夫

児童生徒の道徳的価値の理解を基に、道徳性を養うためには、教材の道徳的価値を自らの生き方と関連づけて、考えさせることが必要である。そのためには、学習指導過程の特質を踏まえた教材の活用と合わせた発問の工夫が大切である。

導 入

<ねらいとする道徳的価値への方向付けの段階>

- ・道徳的価値に意識を向ける。
- ・主題に対する興味や関心を高める。
- ・学習に向かう雰囲気をつくる。

【 留 意 点 】

- ・道徳的価値が自分とかわかりがあるという意識をもたせる。
- ・考えるための視点をもたせる。

○教材提示の工夫

- ・アンケート調査の結果の提示
- ・絵画、写真、実物
- ・音声や音楽
- ・新聞記事や作文、詩
- ・地域素材、実験観察 等

- ・興味、関心を喚起させる発問
- ・資料に関する発問や説明
- ・体験を振り返らせる発問
- ・自分を振り返らせる発問 など

【H30 年度実践例】

江部乙小学校

授業の前に、本時の資料で扱う登場人物と同じような体験をさせておく。



展 開

＜中心的な教材によって道徳的価値についての自覚を深める段階＞

- ・教材の中の登場人物を通して、道徳的価値を追求し、把握する。
- ・多様な考え方、感じ方に出会う。
- ・自分の生活、生き方、在り方を振り返る。

【 留 意 点 】

- ・多様な考え方、感じ方を引き出すための発問を行う。
- ・登場人物に同化させ、自分の考え方や感じ方を表現できるようにする。
- ・自分自身を自覚させるようにする。

○教材提示の工夫

- ・読み物教材の読み聞かせ
(スライド等での提示)
- ・教材の分割提示
- ・教材の繰り返し提示
- ・VTRの活用 など

○思考を深める工夫

- ・自分の考えを書く活動
- ・ペアでの対話
- ・小集団での話し合い
- ・座席配置の工夫
- ・スムーズな思考を促す板書の工夫 など

- ・教材中の事実や場面、状況を問う発問
- ・登場人物や場面についての感想、判断、意見などを問う発問
- ・児童生徒の発言や反応を生かした発問
- ・思考に揺さぶりをかける発問
- ・人物の心情に迫る発問 など



【H30 年度実践例】

滝川第二小学校

パワーポイントによるスライドによる教材の提示を行った。

終 末

＜ねらいとする道徳的価値に対する考えや思いをまとめたり、今後につないだりする段階＞

- ・道徳的価値を確かめ、整理し、まとめる。

○終末の工夫

- ・感想の発表
- ・教師の説話
- ・書く活動
- ・補助教材の提示 など

【 留 意 点 】

- ・望ましい行為への決意表明などは行わないようにする。
- ・児童一人一人が、自らの道徳的な成長や明日への課題などを実感でき確かめることができるような工夫が必要である。

- ・今日の授業についての感想を問う発問
- ・自己の変容や気づきについて問う発問
- ・実践への意欲化を図る発問 など

(2)「展開」における教材の魅力を引き出す発問の工夫

展開において、児童生徒の思考に揺さぶりをかけたり、人物の心情に迫らせ、教材に含まれている道徳的価値に気づかせたりするためには、教師の発問が重要であり、次の点に留意して発問を構成することが大切である。

- ① 教材に回答が記述してあることを聞くだけの発問構成をさける。中心発問はねらいとする道徳的価値について考える切り口に関わるものとして設定する。
- ② 行動の仕方だけを考える発問はさけ、行動の根拠となる心の在り方に関する発問を設定する。
- ③ 読み物教材において、教材中の副詞や副詞句に留意して発問を構成する。行動は動詞で表現されるが、内面的な心の動きを表現するのは副詞や副詞句である。

例) 下線の部分に注目して、ねらいにせまる発問をする

・・・夕焼けの光の中で、祖母の背中が幾分小さくなったように見えた。

発問「祖母の背中が『幾分小さくなったように』見えたのは、主人公の心にどのような思いがあったためだろう？」

道徳的価値の自覚を深める「展開」における発問例

1 展開前段～中心教材を通して価値を追求させる段階～	
ア 道徳的心情を問う発問	「～の場面での主人公は、どんな気持ちですか？」
	「～の時、主人公はどう感じましたか？」
	「主人公の心は、どうなりましたか？」
イ 道徳的判断力を問う発問	「主人公は、そのことをどう考えましたか？」
	「主人公は、どんなことがわかりましたか？」
	「主人公は、どちらを選ぼうとしたと思いますか？」
ウ 道徳的態度を問う発問	「主人公は、どんな生活をめざしましたか？」
	「主人公は、どんなことを心がけていますか？」
2 展開後段～価値を主体的に自覚させる段階	
ア 欠けていた面に目を向けさせる発問	「今までの自分の～に対する考え方で足りなかったと思うことはありますか？」
イ 直接経験から学ばせる発問	「～したとき、自分も悩んだり、迷ったりしたことはありませんでしたか？また、そのことを今、どう思いますか？」
ウ 間接経験から学ばせる発問	「～について、今までに人から聞いたり、本で読んだりしたことはありませんでしたか？また、そのことを今、どう思いますか？」
エ プラスやマイナスの経験を引き出す発問	「～について、今までにできたことや、できなかったことはありますか？また、そのことを今、どう思いますか？」
オ 主人公と比較して内省させる発問	「主人公と自分を比べて、違ったことや、新しく気が付いたことはありますか？」
カ 先人の行いから学ぶ発問	「～から私たちが学ぶことは、どんなことですか？また、それを生かすには、どんな心がけが大切だと思いますか？」

（３）児童生徒の実態の把握

指導計画の作成にあたっては、児童生徒の実態を的確に把握することが必要である。実態に裏打ちされた授業でこそ、子どもの思考を深めたり広げたりする発問が可能となる。そのためには、日常の児童生徒の観察・記録を継続するとともに、児童生徒の道徳性をアンケート調査等により把握することが大切である。

＜日本語説明＞		英語アンケート	
これは、あなたのほかどんな人も受け取らないように送っているという目的で秘密に送っているのです。 この表を誰にも知らず秘密に保管してください。表の裏面にあるように送る前に必ず裏面に 「アンケート」の中にある、1つだけ必ず記入してください。			
①「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		②「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	③「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
④「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		⑤「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	⑥「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
⑦「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		⑧「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	⑨「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
⑩「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		⑪「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	⑫「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
⑬「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		⑭「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	⑮「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
⑯「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		⑰「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	⑱「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
⑲「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		⑳「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㉑「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㉒「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㉓「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㉔「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㉕「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㉖「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㉗「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㉘「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㉙「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㉚「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㉛「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㉜「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㉝「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㉞「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㉟「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㊱「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㊲「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㊳「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㊴「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㊵「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㊶「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㊷「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㊸「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㊹「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㊺「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㊻「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㊼「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㊽「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は
㊾「 ☐ 」に記入してください。あなたの性別は		㊿「 ☐ 」に記入してください。あなたの年齢は	㊿「 ☐ 」に記入してください。あなたの職業は

[illegible]

【H30 年度实践例】

江部乙中学校

事前アンケートの活用による児童生徒の道徳性にかかわる実態把握を行い、それに基づいた授業の「ねらいとする価値」や「指導する内容項目」を設定した。アンケートは内容項目をもとに児童生徒の発達段階に合わせて作成し、研究授業を行う際に必ず実施することとして取り組んだ。

II. 言語活動の充実を図る指導方法の工夫

1. 道徳科における言語活動の充実

学校の教育活動全体で言葉を生かした教育の充実が求められている。言葉は、知的活動だけではなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳科の授業においてもその言葉を生かした教育についての充実を図ることが大切である。

(1) 道徳科の授業における言葉

道徳科の学習では、中心的な教材を活用し、児童の体験や教材に対する感じ方や考え方を交えながら話し合いを深めることが学習の中心となることが多い。その意味からも、道徳科の授業における言葉の役割はきわめて大きい。

国語科では言葉にかかわる基本的な能力が培われるが、道徳科の授業では、このような能力を基本に、教材や体験などから感じたことや考えたことをまとめ、発表し合ったり、討論や討議などにより意見の異なる考え方に接し、協働的に議論したり意見をまとめたりする。

具体的には、

- ・教材の内容や登場人物の気持ちや行為の動機などを考える。
- ・友達のことを聞いたり、自分の考えを伝えたり、話し合ったり書いたりする。
- ・学校内外での様々な体験を通して感じ、考えたことを、道徳科の授業において言葉を用いて交流したりする。

このような活動の中で、国語科等で培った言葉の能力が生かされ、一層高められていく。

したがって、道徳科の授業においては、このような言葉の能力を総動員させて学習に取り組ませることが、ねらいを達成する上で重要である。

(2) 自分の考えを基に書いたり話し合ったりする（表現する）機会の充実

話し合いは道徳科の授業によく用いられる指導方法であるが、話し合いを深めるためには、児童生徒一人一人に自分の考えをもたせ、効果的に表現させるなどの工夫が必要である。

ア 自分の考えを明確にさせるための書く活動

教材から感じた自分の思いや考えを、自己の生活、体験、知的経験等に引き寄せて明らかにするためには、「書く」という活動が大変重要である。

書く活動により、児童生徒が自ら考えを深めたり、あいまいであった考えを整理したりする機会となる。

したがって道徳科の授業においては、自分の考えを明確にさせるための書く活動に必要な時間を十分に確保することが大切である。

また、書く活動により、児童生徒の感じ方や考え方をとらえ、個別指導を進める重要な機会にもなる。更に、1冊に綴じられた「道徳ノート」などを活用することによって、児童生徒の学習を継続的に深めるとともに、その変容を見取ることが可能となる。

イ 個々の考えを広げ、深めるための話し合い活動の工夫

道徳科の授業において、自分の思いや考えをより多面的にとらえたり、新たな考えに出会い深化させたり、自己の葛藤の中から新たな価値観を見いだしたりしていくためには、話し合い活動が重要な役割を果たす。

話し合い活動を深めるためには、意見を出し合う、まとめる、比較する等の目的に応じた場の設定等を工夫することが大切である。具体的には、

- ・児童生徒同士の顔が見えるような座席配置を工夫する。
- ・グループやペアによる話し合いを取り入れる。（話す機会が増え、多くの発言を引き出すことができる）
- ・同じ考えをもつ子ども同士が集まるように座席の移動を行い、一人一人の立場を明確にして話し合う。

などの工夫が考えられる。

道徳科の授業における話し合い活動は、友達との話し合いにより自分なりの思いや考えが深まり、道徳的価値の自覚につなげていくことが大切である。そのためには、学級の中に全ての意見を受け入れる温かい風土が確立されていることが前提となる。

2. 道徳科の授業における「書く活動」「話す活動」の役割とねらい

学校の教育活動全体で言葉を生かした教育の充実が求められている。言葉は、知的活動だけではなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳科の授業においてもその言葉を生かした教育についての充実を図ることが大切である。

(1)「書く活動」の役割とねらい

書くことは、教材との出会いで生じた自身の思いや考えを深めたり、整理したりすることにつながる。また、書く際には、論理的な思考力や適切な判断力が求められ、それらの能力の育成にもつながる。そして、書くという自己を表現する活動によって、自分の考えや立場を明確にすることもできる。そして、書いた内容は周囲の人たちと共有し、共通のものとすることもできる。

本研究では、これらを「書く活動」の役割・ねらいとおさえる。

(2)「話す活動」の役割とねらい

話すことには、情報伝達の役割がある。また、他者に対して、自己についての理解をうながすねらいもある。そして、伝達や交流によってよりよい考えを生み出すという意味合いもある。

本研究では、これらを「話す活動」の役割・ねらいとおさえる。

◆「書く活動」の役割とねらい

- ①自らの考えを深めたり、整理したりする。
- ②論理的な思考力や適切な判断力を育成する。
- ③自分の考えや立場を明確にする。
- ④周囲の人たちと共有し、共通のものとする。

◆「話す活動」の役割・ねらい

- ①情報伝達のねらいがある。
- ②他者に対して、自己について理解をうながす。
- ③伝達や交流によってよりよい考えを生み出す。

「書く活動」と「話す活動」は、いずれも主として言語による表現活動である。前者は文字言語によって、後者は音声言語によって行われる。

学級で話し合うとき、事前に自分の考えなどを一人ひとりに書かせる。このことは、自分の考えを持つ機会になると同時に、「話す活動」に参加するための前提となる。

また、子どもたちは互いに話すことによって、違った考えや見方を知ることができ、新たな知識を習得することができる。この活動を通し、初めに考えたことが、その後に修正される可能性が生じてくる。

話したあとに改めて「書く活動」を組み入れることにより、これまでの学習を振り返り、自分の考えの変容を自覚することができ、自己評価をする機会になる。

3. 「書く活動」「話す活動」を生かした指導過程の工夫

「書く活動」と「話す活動」が道徳科の授業の中で意図的・計画的に仕組みられ、それぞれの活動を充実させることにより、道徳科のねらいである、道徳的価値の自覚と自己の生き方についての考えを深めることにつながると考える。このような指導過程を基本とし、道徳科の授業を行うことによって、目指す子ども像「自己の生き方についての考えを深め、主体的に行動する子ども」に迫っていきたいと考える。

【書く活動】



【話す活動】



【H30 年度実践例】

江部乙中学校

自分の考えをワークシート
に書き込んだ後、グループ内
で考えを伝え合い、他者の視
点に触れ、意見を受け止め合
った。

Ⅲ. 保護者や地域の方などの支援を得た指導の工夫

児童生徒に自他の生命を大切にするなど豊かな心をはぐくむためには、様々な人たちとのかかわり合いの中で、多様な生き方・考え方を学ばせることが必要である。

そのためには、道徳科の授業において保護者や地域の方などを外部講師として招き、生き方や生命に関する貴重な経験など、主題や中心教材にかかわって話をしてもらい、質問を受けてもらうなどの指導の工夫が求められる。

1. 学習指導過程への位置付け

保護者や地域の方などの支援による指導を充実させるためには、次の視点で学習指導過程を工夫することが大切である。

導入

- ・導入において保護者や地域の方をお願いする話の内容などについては、主題について児童生徒が興味や関心をもったり、課題意識を高めるよう配慮することが大切である。

展開

- ・保護者や地域の方の語りや説話を、展開における中心教材として位置づける場合は、児童生徒たちの話し合いが深まるよう、保護者や地域の方などから問いかけを入れていただくことが効果的である。
- ・保護者や地域の方の講話などを、補助的な教材として位置づける場合は、主題にかかわる事柄を補足したり意味付けをすることもできる。話し合いを深めるためには、保護者や地域の方が直接、児童生徒たちの討議に参加することも考えられる。

終末

- ・児童生徒に寄せる保護者や地域の方の愛情は、児童生徒の心に響き感動的な話としていつもまでも心に残る。終末における保護者や地域の方の説話などを、1時間のまとめとして活用したり、今後の発展につなげることが大切である。

2. 保護者や地域の方を迎えるための配慮事項

保護者や地域の方の支援を得るにあたって次のことに配慮することが必要である。

道徳授業の特質

- ・保護者や地域の方を招いた授業を授業改善の一つととらえ、道徳科の特質を押さえ、有意義なものとなるように工夫する。

事前打ち合わせ

- ・保護者や地域の方から協力をいただく目的、授業のねらいと参加していただく形態などについて、事前に打ち合わせをしておくことが大切である。

あいさつやお礼

- ・保護者や地域の方に対する接し方やあいさつ、授業後のお礼の手紙など、児童生徒に対するきめ細やかな指導が必要である。

3. 道徳授業の発信と双方向の取組

児童生徒の豊かな心をはぐくむことは、1時間の授業のみで完結することはあり得ない。また、学校における指導のみで十分ではないことも言うまでもない。学校と家庭が同じ方向を向き、子どもの豊かな心を育てる思いを共有しながら道徳教育を推進することによって、初めて成果が表れるものとする。

そのためには、学校で行っている道徳授業に関わる積極的な情報の発信と、教師と保護者双方の取組の推進が求められる。

第 3 章

平成 30 年度 授業実践

道徳科学習指導案

日 時 平成30年10月24日(水) 5校時
 児 童 滝川市立江部乙小学校1年1組12名
 指導者 教諭 田中 このみ
 (支援学級担任 小黒 俊浩)

1. 主題名「きまりを守って」

C-(10) 規則の尊重

2. ねらい

約束やきまりを守り、みんなが使うものや場所を大切にしようとする心情を育てる。

3. 本時の教材

「きいろい ベンチ」

(小学どうとく1 はばたこうあすへ 教育出版)

4. 主題設定の理由

(1) 児童の実態

本授業を行うにあたり、ねらいとする価値に対する児童の実態を把握するため、道徳性に関するアンケート調査を実施した。本時に関連する項目の結果は次の通りである。

項 目			ア	イ	ウ	エ
A	1	よいこととわるいことのくべつをしている。	9	3	0	0
	2	うそをついたり、ごまかしたりしないようにしている。	10	1	1	0
	3	じぶんのものをたいせつにし、あとかたづけをきちんとしている。	8	4	0	0
	4	じぶんのよいところやよくないところがわかる。	10	1	1	0
C	10	みんなのつかうものをたいせつにし、やくそくやきまりをまもっている。	7	3	2	0

ア～いつもしている、そのとおりだ イ～だいたいしている、だいたいそのとおりだ
 ウ～あまりしていない、あまりそうではない エ～全然していない、全然そうではない

入学後、一緒に学習したり生活したりする中で学校生活に慣れ、学校の約束やきまりを知り、守ろうとする姿勢は徐々に育ってきた。しかし、まだ自己中心性が強く「こ

れぐらいならいいかな。」「自分だけならやってもいいかな。」と、周囲への配慮を欠き、自分勝手な行動をとることも少なくない。そういった行動から友達同士の小さなトラブルに発展することもよくみられる。

自分もみんなも気持ちよく生活するために約束やきまりがあることを理解し、すすんで約束やきまりを守ろうとする心を育てたい。

(2) 教材分析及び教材観

①公園遊びに夢中になりベンチを汚してしまう二人。そこへ小さな女の子が座ってしまい、スカートが汚れてしまう。女の子のスカートを拭いてあげるおばあさんと女の子の様子を見て、自分たちの行動に気づき、「はっ」として顔を見合わせるという構成である。二人の行動や感じ方について話し合わせることをとおして、みんなで使うものを大切に、約束やきまりを守ろうとする心を育てたい。

②低学年の段階は、小学校の入門期として約束やきまりについて指導することが多い。小学校生活が半年を過ぎ、みんなで使う場所、みんなで使うものについて、どのように使えばいいのかを今一度考えさせたい。学校や公共の場を意識して、みんなで使うものをどのように使うことで気持ちよく過ごせるのかを考え、その意味について話し合わせていきたい。

5. 目指す児童の変容

【授業前】

- ・「いいことかわるいことか、よくわからないな。」
- ・「自分だけならやってもいいや。」
- ・「誰も見ていないからきまりをやぶっちゃえ。」



【授業後】

- ・「守らないといけないルールがあるんだね。」
- ・「やくそくは守らないといけないな。」
- ・「きまりって大事だな。」

6. 指導の工夫

(1)「体験」・・・授業の前に、本時の資料で使う登場人物と同じ紙飛行機の体験をさせておく。1年生の段階では、登場人物の行動や気持ちを文章からだけでは想像しにくい児童もいる。また、「良い」「悪い」だけで「どうしてそうしてしまったのか」という考えにもなかなか及ばない。実際に体験させておくことで、「どうしてそうしてしまったのか」、「次からはどうしたらいいのか」を考えさせ、みんなで使う場所やもののきまりについて考えさせていきたい。

(2)「話す活動」「書く活動」・・・ペアでの話し合い活動を取り入れる。自分の考えがもてない子や考えがまとまらない子も、友達の見解を聞いて自分の考えの参考にすることができる。また、話し合いをした後は、自分の意見をワークシートに書く活動を取り入れる。全体での交流に役立てていきたい。

7. 本時の展開

段階	主な学習活動	形態	・留意点 ◆評価
導入 (5分)	○紙飛行機を飛ばした体験を思い出す。 紙飛行機で遊んだときどんな気持ちでしたか。 ・楽しかったね。 ・またやりたいね。 ・もっと飛ばしてみたいね。 ○「きいろいベンチ」を P53 まで読み、自分たちが飛行機を飛ばした経験を思い出しながら考える。 紙飛行機で遊んでいる二人はどんな気持ちでしょうか。 ・楽しいな。 ・もっと飛ばしたいな。	全体 全体	・自分たちの体験を思い出して交流させる。 ・教師の範読を聞く。 ・自分たちと同じことをしている文中の登場人物の気持ちを考えさせる。
展開前半 (20分)	○「きいろいベンチ」の後半 P54~P55 を読む。 二人がはっとして顔をみあわせたのはなぜでしょうか。 ・自分たちがベンチをどろだらけにした。 ・女の子のスカートを汚してしまった。 ・悪いことをした。 ○二人がしたこと困ったところを考え、プリントに書く。 二人がしたこと困ったところはどこでしょうか。 ・くつのままベンチに上がったこと。 ・ベンチをどろだらけにしたこと。 ・遊びに夢中になってベンチをよごしたこと。	全体 ペア 個人	・教師の範読を聞く。 ・おばあさんの言葉を聞いて、みんなで使うベンチを汚して女の子に迷惑をかけてしまった二人の気持ちを考えさせる。 【話す活動】ペア 【書く活動】ワークシート ・たかしとてつおの行動の問題点を考えさせる。 【書く活動】ワークシート ◆登場人物の行動の問題点を考えることができるか。

9. 板書計画

きいろいベンチ かみひこうきをとばしていたとき ・ たのしい。 ・ とおくにとばしたい。 はっとしてかおをみあわせたとき	・ 自分たちがベンチをどろだらけにした。 ・ 女の子のスカートを汚してしまっ ・ た。 ・ 悪いことをした。 ふたりがしたことのコまったところは？ ・ くつのま ・ ベンチに上 ・ がった。 ・ ベンチをど ・ ろだらけに ・ した。 ・ 遊びに夢中 ・ になっ ・ ンチを汚し ・ た。	みんながつかうものは、どうつかえばよいのだろう ・ きれいつかう。 ・ よごさない。 ・ きまりをまもってつかう。 みんながきもちよく！
--	---	--

【本時の中心教材】 「きいろいベンチ」(小学どうとく1 はばたこうあすへ 教育出版)

月 日

なまえ ()

【ちろちろぐんち】

○はっとして かおを みあわせたとき、
たかしてておは、しんな ちもちだっただしょう。

○ふたりが したことの りせつた ところは
といてしょう。

○みんなが つかうものは、 どうつかえば
よくなるでしょう。

道徳科学習指導案

日 時 平成30年11月22日(木) 6校時

児 童 滝川市立滝川第二小学校

6年2組 40名

指導者 教諭 釣本 浩一

1. 主題名「インターネットを使ったコミュニケーション」

B-(7)

誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること。

2. ねらい

- ・顔の見えないコミュニケーションにおいて、他者の気持ちに立って考えることのできる態度を育てる。
- ・情報社会の性質を理解し、コミュニケーショントラブルを予測した行動をしようとする姿勢を育てる。

3. 本時の教材

情報モラル学習参考教材「インターネットを使ったコミュニケーション」
(滝川市教育委員会)

4. 主題設定の理由

(1) 児童の実態

本授業を行うにあたり、道徳性に関するアンケート調査を実施した。本時に関連する項目の結果は次のとおりである。(39名回答)

項 目		ア	イ	ウ	エ
A	6 正しい考えをもって、物事に取り組もうとしている。	14	18	7	0
B	7 だれに対しても、思いやりの気持ちをもって、親切にしている。	10	21	8	0
	11 相手の立場にたって考え、自分と違う考えも大切にしている。	10	19	7	3
C	12 学校や社会のルールを守り、自分のすべきことを果たしている。	15	20	4	0
D	19 自分の命、他の人の命を大切にしている。	31	6	0	1

ア～いつもしている、そのとおりだ イ～だいたいしている、だいたいそのとおり
ウ～あまりしていない、あまりそうではない エ～全然していない、全然そうではない

学級の中では、これまで大きなトラブルもなく、ものの善悪をきちんと判断できる子が多い。また、他者の思いを考えた言動をすることができる子も多い。ただ、普段仲が良い子ども同士でも、羽目を外して相手を傷つけるような言葉でからかい、喧嘩となることもあった。

一方、高学年に入り、スマホや通信機能のついたゲーム、パソコンなどによって、自由にインターネットを使用している子どもも少なくない。6年2組でも、何らかの機器によってインターネットを利用しているのは87.5%(スマホ～42.5%、通信機能のついたゲーム～67.5%)、そのうちSNSを利用したことがあるのは52.9%だった。学年の中で、LINEを巡るトラブルが

発生したことがあり、これまで児童や保護者を対象に数回注意喚起したこともある。インターネットを利用したコミュニケーションは、便利な一方で、様々なトラブルを引き起こしかねない側面もある。そうした問題行動を回避するためにも、それを利用する上でのマナーや、互いの思いを大切にしながらコミュニケーションすることの大切さを考えるきっかけとしたい。

(2) 教材分析及び教材観

①今回使用する教材は、滝川市教育委員会が作成した「情報モラル学習参考教材」である。この中には、1)「インターネットを使ったコミュニケーション」、2)「生活を大切にするインターネットの使い方」、3)「個人情報やプライバシーを守るインターネットの使い方」の3つの教材が収録されているが、今回は1)を取り扱うこととした。それは、子どもたちの日常の中で最も身近なインターネットの利用がSNSであるからである。

②題材は、サッカーをやめるか否かで迷うヒロト君が、太郎君にLINEで相談するところから始まる。太郎君が悪意なしに(ただし、言葉足らずな表現で)送ったメッセージがヒロト君に誤解を与えてしまい、それからクラスメイトにも広がって問題が大きくなる、という話である。この中には、インターネットでコミュニケーションを取るとき、感情の行き違いが起こらないようにするためにはどうすべきか、また、一方の立場からの情報が拡散したときどのような問題が起こるか、ということが扱われている。事例を紹介していく中で、登場人物の行動のどこに問題があるのか、自分だったらどのように対応するだろうかを考えさせたい。

5. 目指す生徒の変容

【授業前】

- ・ SNS を利用するときに、不用意な言葉でメッセージを送るかもしれない。
- ・ 友達が送ってきた情報を、安易に信用してしまうかもしれない。



【授業後】

- ・ 相手がどのような思いでそのメッセージを受け取るかを考え、その人に寄り添いながらコミュニケーションを取ることができる。
- ・ インターネット上の情報を安易に信用せずその真偽を確かめ、冷静に対応することができる。

6. 指導の工夫

(1) 教材提示の工夫

本時使用する教材は、パワーポイントのスライドによるものである。文章を読むよりも直接的に視覚に訴えることができるので、児童の興味関心を持続しやすいと考える。

(2) 「書く活動」「話す活動」

登場人物がどのように行動すべきだったか、自分だったらどうするだろうかをワークシートに書かせることにより、子どもたち自身の考えを整理させ、次の交流につなげていきたい。また、全体交流ではなかなか発言できない子どももいるので、グループでの交流も活用していきたい。

7. 本時の展開

段階	主な学習活動	形態	・留意点 ◆評価
導入 10分	○「コミュニケーション」とはどのようなものかを確認する。 ・ 思い ・ 感情 ・ 考え方 → お互いをわかり合うこと ○対面とネットと2つの形態のコミュニケーションについて、それぞれの良さを比較する。 会って話す～顔が見える、声が直接聞ける、感情が伝わる ネット ～会えなくても話せる、いつでも話せる ○ネットによるコミュニケーションで、困ったことや嫌な思いをしたこと、不安なことを交流する。 ・ LINE の中で、嫌なことを言われた。 ・ すぐに返事をしなければならなくて大変。 ・ 変なメールが来るのでないか不安。 ○学習課題を確認する。 ◎インターネットによるコミュニケーションをするときに、どのようなことに気をつけなければならないだろうか。	全体 個人 ↓ 全体 全体 全体	・ 個人で考えを書き、グループ→全体で交流する。 (「ワーク①」に記入) ・ 実体験をまとめる場合、詳細な内容には触れさせない。 ・ スマホ等を使用していない子は、不安要素としてどのようなイメージを持っているか交流する。
展開前半 15分	○太郎君とヒロト君の事例の、前半について考える。 英会話教室とサッカーを掛け持ちしているヒロト君が、両立することの不安を太郎君にメッセージで送る。太郎君は、ヒロト君に英会話を頑張ってもらいたいという気持ちから、「ヒロト君がいなくても大丈夫!」と返信する。 ○メッセージの文言によって、発信者に意図が正確に伝わらないことに気づく。 ヒロト君は、このメッセージを見てどのように思ったのでしょうか。	全体 全体	・ スライドを見せながら、教材文を読み上げる。 ・ 太郎君には悪意がなかったこと、ヒロト君の受け取り方も彼の立場からすると自然なものだったこと

	・英会話を頑張れという意味。 ・ヒロトはいてもいなくても同じ。 返信を見たヒロト君は、「太郎は自分が悩んでいるのにひどいことをいうヤツだ」と感じる。一方、太郎君は、「ヒロトがサッカーからいなくなるのは嫌だけど、英会話を頑張ってもらいたい」という気持ちだった。 ○思いがすれ違った登場人物について、どうすべきだったのかを考える。 ヒロト君と太郎君は、それぞれどのようなところに気をつけるべきだったでしょうか。 ヒロト君 ～ ・相手に直接会って相談すべき。 ・太郎にどのような意味の返信だったのかを確認すべき。 太郎君 ～ ・「ヒロトがサッカーからいなくなるのは嫌だけど」という言葉も入れるべき。	に留意させる。 個人 ↓ 全体 ・ワークシートに、自分の考えを記入し、学級全体で交流する。（「ワーク②」） ◆それぞれの立場に立ったとき、相手の気持ちを考えるとどのような言動をすべきだったかを書くことができたか。
展開後半 15分	○太郎君とヒロト君の事例の後半について、考える。 太郎君の気持ちを勘違いしたまま、腹を立てたヒロト君は太郎君との会話の画面を画像にして、「ひどいメッセージがきた」という言葉とともにクラスメイトに送った。その結果、太郎君とヒロト君のやりとりはたくさんの人に伝わり、「太郎君はひどい人だ」という噂が広まってしまった。 ○太郎君の気持ちを考え、もし自分がクラスメイトの立場だったらどうするかを考える。 クラスメイトは、太郎君からのメッセージがきたとき、どのようにすべきだったでしょうか。	全体 ・スライドを見せながら、教材文を読み上げる。 個人 ↓ グループ ↓ 全体 ・ワークシートに記入したものを、数名に発表させる。（「ワーク③」） ・それぞれのタイミングでどう行動すべきかを考え、グループで交流する。

	①ヒロト君から画像がきたとき ～・他の人には広めない ・仲直りするように伝える。 ②太郎君についての噂が広がっていることを知ったとき。 ～・太郎君がどういう意図で送ったメッセージか、確認する。 ・それ以上広がらないように、みんなに注意する。 ・大人に相談する。		◆インターネットによるコミュニケーションの特性をふまえ、トラブルを回避するためにどのようにすべきかを考え、交流することができたか。
終 末 5 分	○インターネットでコミュニケーションを行うときに気をつけることをまとめる。 ・相手に思いやりを持つこと ・ていねいな言葉を使う。思い込みで判断しない。 ・情報には間違いもあることを心に留めておく。 ・困ったときには大人に相談する。	全体	・ワークシート「コミュニケーションを上手に利用していくには？」にまとめる。

8. 評価

- (1) 顔の見えないコミュニケーションにおいて、他者の気持ちに立って考えることの大切さに気づくことができたか。
- (2) 情報社会の性質を理解し、コミュニケーショントラブルを予測した行動を考えることができたか。

9. 板書計画



【本時の中心教材】

情報モラル学習参考教材「インターネットを使ったコミュニケーション」
 (滝川市教育委員会)

「インターネットを使ったコミュニケーション」

6年2組 番 名前

ワーク① それぞれのコミュニケーションのいいところを見つけよう！

会って話す	
インターネット	

ワーク② それぞれの登場人物は、どのようなところに気を付けるとよいと思いますか？

スマホで悩みを相談したヒロト君 	
「僕はヒロトがいなくなっても大丈夫！」 と返事をした太郎君 	※どのような返事をするとうよかったかな？

ワーク③ 皆さんがこのクラスにいたとしたら、どのような行動をとろうと思いましたか？

--

★コミュニケーションを上手に利用していくには？

1.
2.
3.
4.

情報モラル学習

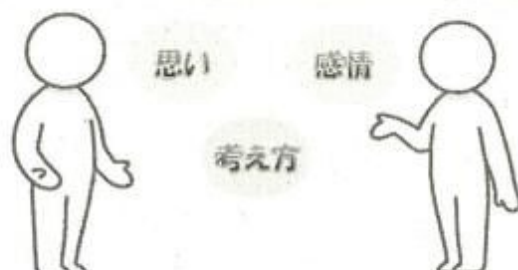
インターネットを使った

「コミュニケーション」



コミュニケーションとは…?

お互いのことをわかり合うこと



会って話す



インターネット



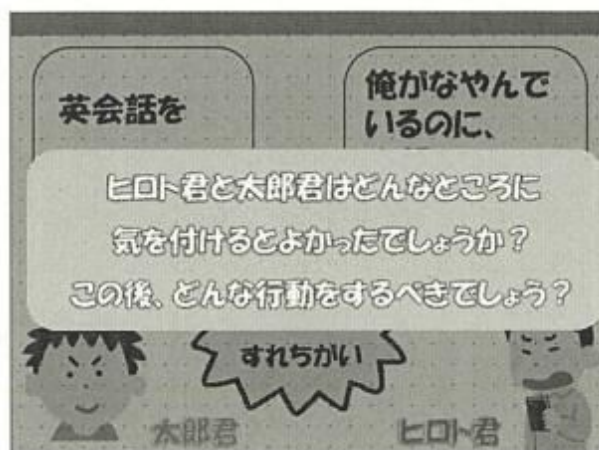
それぞれの「いいところ」をできるだけ多く
書き出しましょう！

インターネットをつかった

コミュニケーショントラブル

主な登場人物





ヒロト君と太郎君の
やいどりを見た人達は…

太郎はひどいことを

皆さんが太郎君の立場なら、
どのような気持ちになりますか？

そんなことを言う
太郎は皆で無視しよう



もし、このクラスに皆さんがいたら、
どのような行動をとろうと思いましたか？

太郎はひどいことを
言うやつだ

そんなことを言う
太郎は皆で無視しよう



ネット上のコミュニケーションを 上手に利用していくには？

- 1 相手の生活環境に思いやりをもつこと
- 2 ていねいな言葉を使う 思いこみで判断しない
- 3 情報はまちがいもあることを心にとめておく
- 4 大人に相談することも大切

道徳科学習指導案

日 時 平成30年10月2日(火) 5校時
生 徒 滝川市立江部乙中学校

3年A・B組 15名

指導者 教諭 川原 かおる
(支援学級担任 広瀧 龍一)

1. 主題名「個性や立場の尊重」

B-9 相互理解、寛容

自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと。

2. ねらい

それぞれの個性や立場の違いを偏狭な見方でとらえることなく、いろいろなものの見方や考え方を幅広く理解し、互いに認め、生かし合う態度を育てる。

3. 本時の教材

「しあわせ」(タマゴマンは中学生 入学編 坂本 勤 北海道新聞社)

4. 主題設定の理由

(1) 生徒の実態

本授業を行うにあたり、ねらいとする価値に対する生徒の実態を把握するため道徳性に関するアンケート調査を実施した。本時に関連する項目の結果は次のとおりである。

項 目		ア	イ	ウ	エ
B	6 感謝の気持ちをもって、人と接している。	8	7	0	0
	7 時と場をわきまえて、礼儀正しくしている。	10	4	1	0
	8 友達(男子・女子)と仲良く協力し、助け合っている。	8	5	2	0
	9 相手の立場にたって考え、自分と違う考えも大切にしている。	7	8	0	0

ア～いつもしている、そのとおりだ イ～だいたいしている、だいたいそのとおりだ
ウ～あまりしていない、あまりそうではない エ～全然していない、全然そうではない

本学級は、小学校から9年間、転入・転出が数名いたがほぼ同じ顔ぶれである。良くも悪くもお互いのことをよく知っており、若干固定されている友人関係もあるが、男女分け隔てなく仲よくしている。学級会等では、誰もが意見を発表することはできているが、発言力のある生徒の考えに流される傾向がある。

本時では、それぞれが感じる「しあわせ」とは何かを考え、「しあわせ」にもいろいろな見方や考え方があるということを理解し、互いに認め、生かし合うためにはどのようにしたらよいかを考えるきっかけとしたい。

(2) 教材分析及教材観

あるものを快・不快と感じたり、好き・嫌いと感じたり、あるいは、損である・得であると考えたり、立場や考え方の違いから大切と考えたり、そうではないと考えたり、感じ方・考え方にはそれぞれに違いがある。それぞれの違いを偏狭な見方でとらえることなく、幅広く理解することは自分自身を豊かにすることにもつながる。そこで、互いの個性や立場を認め合い、互いに生かし合うことの大切さに気づくようにしたい。

5. 目指す生徒の変容

【授業前】

助け合ってはいるけれども、
そうでない生徒もいる



【授業後】

- ・個性を認め合う
- ・相手の立場に立って物事を考える。

6. 指導の工夫

(1) 教材の提示の工夫

前半と後半に分けて提示することで、資料の先読みをすることがなく、1つ1つの発問に集中して取り組める。

(2)「書く活動」と「話す活動」

学級で話し合うとき、事前に自分の考えを一人ひとりに書かせる。このことは、自分の考えを持つ機会になると同時に、「話す活動」に参加するための前提となる。また、生徒はお互いに話すことによって、違った考え方や見方を知ることができ、新たな知識を習得することができる。この活動を通し、初めに考えたことが、その後に修正される可能性が生じてくる。話したあとに改めて「書く活動」を組み入れることにより、これまでの学習を振り返り、自分の考えの変容を自覚することができ、自己評価をする機会になる。

7. 本時の展開

段階	主な学習活動	形態	・留意点 ◆評価
導入 (5分)	○みんなが考える「しあわせ」について話し合う 何を食べた時に「しあわせ」と感じますか。 ○学習課題を提示 みんなが「しあわせ」と感じるにはどうしたら良いのかを考えよう	全体	・笑顔の写真を见せる ・ねらいとする道徳的価値への方向付けを行う

展開前半 (10分)	○「しあわせ」の前半を読んで話し合う。 ○タマゴマンが気づいたことについて考える	全体	
	食べ物の好みが一人一人違うようですが、タマゴマンはそこからどんなことに気づいたのでしょうか	個人	【書く活動】 ワークシート
	・人間の考えていることは一人一人違う	全体	
	○自分の「しあわせ」とみんなの「しあわせ」は同じものであるか、考え、話し合う。	個人	【書く活動】 ワークシート
展開後半 (30分)	タマゴマン、アナゴマンの「しあわせ」はどんなことでしょうか。同じ？違う？また、みなさんの「しあわせ」は？	ペア	【話す活動】 ・「しあわせ」は人それぞれであることに気付く
	・それぞれ「しあわせ」は違う		
	○「しあわせ」の後半を読んで話し合う	全体	
	◎考え方の違いを知り、その先にあることを考える		
	考え方のちがいを知ることがスタートなら、ゴールはなにをめざしていったらよいと思いますか	個人	【書く活動】 ワークシート ◆自分なりに具体的なイメージを持って道徳的価値を理解しようとしている。【書き込み】
	・自分の考えを班で交流する	班	【話す活動】
	・ホワイトボードにそれぞれの考えや新しい考えを書き、発表する準備をする。	全体	◆友達の考えを聞き、新たな道徳的価値に目を向けて考えようとしている
	・班→全体という段階を経て考えの共有化をはかる		【発言】 ・道徳的価値を確かめ、整理してまとめる。
	○互いの考えや立場の違いを認め合うことについて考える		
	・認め合えないような例を提示する		
	グループの中で違う意見が出た場合、どのようにして決めればよいのでしょうか。	個人	【書く活動】 ワークシート
	・自分の考えを書く ・発表を聞いて最も良いと思った決め方を書く	全体	・数名に発表させる

終末 (5分)	○今日の学習を通しわかったことをふり返る ○教師の説話を聞く	全体	・互いの考えや立場の違いを認め合うことの大切さについて、教師自ら経験をもとに語りかけ、余韻を残す
------------	-----------------------------------	----	--

8. 評価

- (1) 生徒は、登場人物への自我関与を通して、自分なりに具体的なイメージを持って道徳的価値を理解しようとしていたか
- (2) 生徒は、話す活動を通して、自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしていたか

9. 板書計画

3班

1班

4班

2班

これでも認められる？

◎目指すゴールはなんでしょう？




それぞれ違う

タマゴマン
アナゴマン
マールポ豆腐

のり巻き

課題 「みんなが「しあわせ」と感じるにはどうしたら良いのかを考えよう」

「しあわせ」

《引用参考文献》

・東京書籍 中学道徳 明日をひらく

【本時の中心教材】

「しあわせ」(タマゴマンは中学生 入学編 坂本 勤 北海道新聞社)

「しあわせ」①

番 氏名

1. 資料を読んで、タマゴマンが気づいたことを書いてみましょう。

2. タマゴマン、アナゴマンの「しあわせ」とはどんなことでしょうか。

タマゴマン

アナゴマン



タマゴマンとアナゴマンの「しあわせ」は同じ？違う？

タマゴマンとアナゴマンの「しあわせ」は・・・



みんなの「しあわせ」はどんなこと？

私の「しあわせ」は・・・

3. 考えのちがいを知ることがスタートなら、ゴールはなにをめざしていったらよいと思いますか。

自分の考え

班員の考え

発表を聞いて考えた事



「しあわせ」②

番 氏名

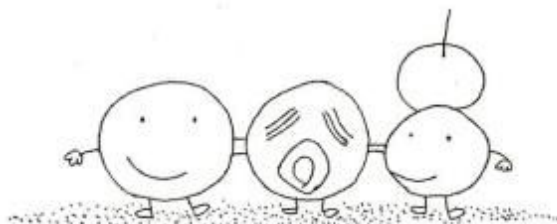
4. 修学旅行で自主研修に行きます。Aさんは〈鶴岡八幡宮〉に、Bさんは〈銭洗弁財天〉に行きたいと言っています。どちらか1カ所にしか行けません。どのようにして決めればよいでしょうか。

良いと思う決め方

理由

最も良いと思った決め方

今日の学習をふり返り、気づいたこと、感じたことを書きましょう。



そんな会話を給食を食べながら聞いていた先生は、しんなりとした。

「遅れやば御冥加治しうの作家を知つておますか。国語の教科書に『マシクツと森』という作品が載つておます。おしやうたのう学校で『注文の多い料理店』とか『風の又三郎』という作品を読んだ人がいるかも知れません。

その作家は『世界中の人が幸福にならないがぎり個人の幸福はありえない』とある本の中に書いています。

「なまじりか舞うじやないや。とか謡ひは、この朝ぐさのやうに染るゝ作品を舞う
て居た。」

これをこの学級に当てはめると、『クラス中の人が幸福にならないかぎり個人の幸福はありえない』となりますね。それは難しいことだけれど、とても大切な考え方だと僕は思っています。皆さんはどう思いますか。アタリマは今日が一番しあわせって言っています。この給食を材料にしてそのことを考えてみてください」

みんなは食うながら次々に発言した。

口火を切ったのは大門口のあたりだ。

「先生、僕は今日の給食のマーホ豆腐が一番好きだから、食べたいしあわせてほしい、嫌いな人もいます。だから、みんながしあわせになるなんて無理だと断ります。だからがしあわせって思ったら、だれかは、しあわせって断つんじゃないのかな」

「マーホ豆腐嫌いな人は今日はらうあわせかもつれなうけむ、カリーライスが好きだった
ら別の日にうあわせになるんだから、同じ時に同じものもつにうあわせになれなくても、平均
すると同じものになるんじゃないのかなあ」と言っただのは男子の学級代表。

「嫌いな給食が出た時は好きな人に分けてあげて、自分の好きなものが出たら逆に今日のオしみたいにもらうのもいいかもしれない。そしたら、みんなしあわせだ」

「歴史は物事を教えるために、人間を教える。」と、トマス・ペインは言う。そして、彼は、

「先生は今日の給食からしあわせについて考えなさいって言ったけど、食べ物からしあわせなんて感じないって、みんなもだんねんって思うから。だからこの話は難しうって思うから。」女子の学級代表の意見は鋭い。

「オノノ一番のしあわせは給食を食える時だよ。他にしあわせな時なんてないよ」トナリ
トナリ口をこぼらじマーホ豆腐を入れたまま叫んだ。

難うござるだうたうたうは思つた。しんやうをなうしうも語う合うてみたら考え方が違つてゐるじやわかる。嫌うなものは人に食うてやうして、なまなものをむけやういなんていつのは自分にはなかなかな都合のいい考え方だをあらうて思つた。

先生は最後に、「みんなの考え方の違いを知る」ことが全体のしあわせを考えるスタートです。今日の話し合いは、その小さなスタートになったよねが、気がしめます」と言った。

ドーホ豆腐の日は、しつぱたアアアハはおなかをすかせて家に帰り、冷蔵庫のおやつを
黙ってしる。じやな田にわちて回にもなうんだなあ。

授業実践の反省 ～各研究協議より～

江部乙小学校 田中 このみ 教諭の授業

☆指導の工夫について

(1) 教材の提示の工夫～授業の前に、本時の資料で扱う登場人物と同じような体験をさせておく。

- ・前日の生活科の学習で、同じ体験をさせたことは、読み取りが苦手な子にとって効果的であった。
- ・実体験から登場人物の心情に迫ることができていた。ステージに上がって遊んでしまったこと(禁止されていること)は、まとめにうまく活用できていた。



(2) 「話す活動」と「書く活動」～ペアやグループ、全体での交流及び各交流後の「書く活動」

- ・書く力が身についていた。
- ・書く分量としては、1文程度が妥当。
- ・話す活動ができていたが、班によっては、話の内容がそれているところもあった。
- ・小学校1年生であれば、「話す」「書く」を分けていくことが必要。
- ・考えていることをまとめることの指導→見取りや評価が手厚くできていた。
※学級の数が増えると書くことを苦手としている子、話すことを苦手としている子が出てくる。その子への指導が大変。

☆授業全般について

<導入>

○課題の提示について～課題がなかったが・・・

- ・授業の内容によっては、課題を提示することにより方向性が定まってしまうので、子どもたちの意見をもとにして授業を収束させていってもよいのではないかな。
- ・国語や算数などと同様の授業にならないこともあるのではないかな。

<展開>

○ブランコに立って乗っている男の子二人について扱っていなかったことについて

- ・扱ってしまうと授業のねらいから離れてしまうのであえて扱わなかった。

○挿絵について

- ・教科書の挿絵を見てベンチが汚れていることをわかってしまった子が多く見られたので、本文のみをプリントに印刷して渡したり、読み聞かせをしたりするともっとインパクトがあったのではないかな。(黒板に貼った挿絵は、ベンチが汚れている部分を見せないようにカットされており工夫が見られたので)

○発問について

- ・「どう使えばよいかな」ではなく「どういうことに気をつけてつかえばよいかな」等であればよかったかもしれない。
- ・「みんなで使うもの」と「みんなが使うもの」とでは子どもたちのとらえ方は違う。
- ・みんなが使うもの→汚されたら嫌なもの、困るもの子どもたちの身近なものに目を向けさせる

<終末>

○公共物のマナーについて

- ・学校の約束事とは質が違うので、両方を扱うことがよかったのかどうか

○教科書について

- ・教科書の設問に違和感を感じる。ルール・決まり、公共物の使い方と私語(おしゃべり)が同列なのは授業を構築する上で問題があるのではないかな。

☆指導の工夫について

(1) 教材の提示の工夫～パワーポイントのスライドによる提示。

- ・読み物よりも視覚に入りやすい
- ・発問がわかりやすいパワーポイントになっていた。

(2) 「書く活動」と「話す活動」～グループ交流に繋げるワークシートへの記入

- ・ワークシート②への記入
児童はそれほど大きくずれてはいなかった。主旨がよくとらえられていたということではないか。
- ・かけない子へのフォロー
(授業者より) それほど文章を書ける児童は多くないということもあり、近くの子とお互いワークシートを見せ合い、その考えを書かせた。評価としては、友達の考えに共感したら自分の意見としておさえてもよいのではないか。

☆授業全般について

<導入>

- ・課題、目標が明確であった。
- ・自分のクラスに引き戻しながらやっていたことが有効であった。
- ・事前に行っていたアンケートの内容にも触れていたことがよかった。

<展開>

- ・メッセージの受け取り方・・・ひどいという子が多かった。授業者としては想定外だった。
- ・返信まで時間がかかった。※イライラした状態で受け取るという設定
- ・情報には不確かなことがあったが、その部分を授業の中でしっかりとおさえられていたので子どもたちは納得できていた。
- ・途中ワークシートにかけていない子がいた。このような場合、評価にもかかわってくることであるため、評価方法について検証する必要がある。

<終末>

- ・教材の「まとめ」の2つめについて
 - ①「ていねいな言葉を使う 思いこみで判断しない」は別々の内容が一つの文章となっている。
 - ②(授業者より) 授業では、学級の実態にふさわしい「ていねいな言葉を使う」という部分のみを扱った。
 - ③ていねいの捉え方
「わかりやすい」という意味と「乱暴ではない」という意味でとらえることができる。
(授業者より) 本時は、学級の実態として言葉遣いが乱暴であるため後者の意味で扱った。

☆その他

- ・最後のまとめを子どもたちの考えとしていくために考えられる方策

※本時は教師側で提示してワークシートに記入させていた。

①ワークシート①の部分の工夫

- ②個人思考の場を省略し、グループ討議ですぐに話し合う

・評価とワークシートの関係

書く力は国語と関連している。ワークシートがなければかけない子もいる。いろいろな視点(発言等)から見取っていく必要がある。



☆指導の工夫について

(1) 教材の提示の工夫～資料を前半と後半に分けて提示する。

- ・資料を分けて提示してあり、わかりやすく展開していた。

(2) 「書く活動」と「話す活動」～「話す活動」と「話す活動」の組入れ方

- ・書く活動で自分の考えを整理していたが、話をしてからがやや不十分であった。もっと自分で振り返り、道徳的価値について深めることが必要。
- ・ワークシートへの記入が短時間でできている。普段から書く訓練がされているものと思われる。

※学校のテーマ「発信力」は、他の教科でも活動に取り入れている。

☆授業全般について

＜導入＞

- ・導入が食べ物だったことでスムーズに授業には入れたのではないかと。絞り込まれてよかった。
- ・自然に食べ物の話から離れていったのは3年生らしい反応。



＜展開＞

- ・タマゴマン、アナゴマンの考え・・・生徒たちは食べることに焦点をあてると同じだが、根本を考えると違うと捉えることができていた。
- ・「医大の話」と「消費税」の話・・・生徒たちからそれぞれ意見が出ていた。
- ・「ゴール」「認め合う」について・・・「違いを受け止める」「ゴールを決めない」などが出ていた。
- ・修学旅行の話・・・じゃんけんなどもっと出るかと思ったが、話し合う意見が多く見られた。現実では話し合いで譲ることも多くある。
- ・「前半みんながしあわせを感じる→後半みんながしあわせになるために」と変化したのではないかと均等なしあわせという考えも出ていたが、全員が幸せでなくても他人の幸せを認め合えばよいのでは
- ・修学旅行での自主研修の決め方・・・自分たちの生活に引き寄せるのはよいが、多数決によらないことが本題であるので、本質的な問いがこの場面では必要であったと思う。

＜終末＞

- ・自分の考えと違うことが認められるという感想が見られた。真剣で鋭い意見が多く出ていた。

☆その他

- ・最後の子ども写真でのまとめは、子どもについてわかりやすくまとめられていた。
- ・生徒の感想などの声はこれまでの授業で積み上げられた成果である。生徒の変容は、1時間の授業を終えた後すぐに見られるものではなく、後から徐々に見られてくるものである。

第4章

成果と課題

1 研究内容について

（1）児童生徒の思考を深める発問の工夫

【視点】

①児童生徒の思考を深める発問の工夫

ア：学習指導過程の特質に応じた発問の工夫

イ：「展開」における教材の魅力を引き出す発問の工夫

ウ：児童生徒の実態の把握

成果	ア：学習指導過程の特質に応じた発問の工夫 ・価値観や内容項目の一方的な押しつけとせず、子どもたち自身が考えることを促す発問となっていた。 ・各授業のそれぞれの指導過程において、「児童の実態に即し、意図を持った発問」がなされていた。（課題を捉えるための発問、深く考えさせるための発問、自分事として引き寄せるための発問） ・児童の実態に合わせて発問が工夫されていた。児童が教材の内容だけではなくて、自分事として考えるきっかけとなる発問だった。 ・どの授業実践も、児童生徒の実態にあったものであり、自分のこととして考えやすい内容であった。 ・導入段階ではこれまでの経験から、展開前半では登場人物に自分自身を重ねて、展開後半では今後の自分についてといったように、学習過程を進めていく中でしっかりと考えを深めることができていた。 ・子どもたち一人一人が自分の意見を持ちやすい発問がされていた。 ・教材を生かすために授業者が意図した発問がされていた。 ・どの教材（パワーポイントや教科書）も一度で全て読み切らず、区切ることで児童生徒の発想力をかきたてていて良かった。 ・思考が偏らないような発問をすることができていたので、個々の考えが深まっていった。 ・それぞれの授業において、児童の実態を踏まえた発問をしていた。 ・子どもにどのようなことを考えさせるか、明確な意図を持った発問がされていた。 ・どの授業についても、子どもたちの実体験や生活に結びついた発問が工夫されており、それに基づいて、いきいきとした発言や討論につながったと思う。 ・事前に資料の登場人物と同じ体験をさせたり、自分の生活を振り返ったりする発問を導入に入れるなどの効果的な工夫があった。 イ：「展開」における教材の魅力を引き出す発問の工夫 ・「きいろいベンチ」の展開前半で、教科書を伏せて、教材の絵を見せることによって、児童の発想力をかきたてていて良かった。 ・考えさせたい道徳的価値に気付かせる発問や揺さぶりをかける発問はちょっと言葉が変わるだけで考えが深まったり進んだりすることもあった。
----	---

	ウ：児童生徒の実態の把握 ・江部乙小田中先生の授業にあった、前日に紙飛行機の体験をさせたことが「自分事として捉える」上で非常に有効だったと感じた。第二小釣本先生の学級におけるアンケートの活用も、教材と自分たちの生活を繋ぐ大きな役割を果たしていたように思う。読み物は自分たちと別の世界の出来事になりがちなので、このような取り組みは非常に大切だと考える。 ・事前にアンケートをとることで、児童の実態を把握することができた。 ・研究授業前に実際に紙飛行機を飛ばす体験をすることで、導入がスムーズで良かった。 ・「インターネットを使ったコミュニケーション」でネットトラブルの事前アンケートを取ることで、生徒が課題を身近に感じることで良かった。 ・本授業を行うにあたって、事前に考える材料となりそうな体験を実施するなど、発達段階に応じた思考が深まりやすいような工夫がされ、それらがとても有効だと感じた。 ・「きいろいベンチ」では、事前に紙飛行機を飛ばした実体験をよくふまえており、子どもたちも自分自身に引き寄せて考えることができていたと思います。道徳では、自分自身の経験をもとに思考を深めることに有効な手立てであったと思う。 ・情報コミュニケーションについては、現状にあった教材とPPにより、子どもたちの興味をよくひきつけており、身近なインターネットやSNSとの付き合い方を振り返り、これから起こり得るであろう内容に即していたと思う。 ・道徳性に関するアンケートを有効に使い、生徒の実態と照らし合わせた授業作りをしていた。 ○ 各指導過程において、児童生徒の実態に即した発問がされていた。その発問により、児童生徒のより活発な発言を促したり、話し合い活動に繋げることができた。 ○ 教材の提示の仕方及びその際の発問により、児童生徒の発想力を掻き立てることができた。 ○ 事前アンケートを児童生徒の実態把握の一つの判断材料とし、授業づくりに生かすことができた。
課題	ア：学習指導過程の特質に応じた発問の工夫 ・指導言を整理しないと発問が広すぎて曖昧になってしまうことがあるので、学年や実態に合わせた発問を工夫することが大切だと感じた。 ・終末の振り返りの時間が全体的に少なく感じました。自分の考えをまとめたり、他の意見を聞くことで、より自己変容に気付けたと思った。 ・発問の仕方次第で、話がそれてしまうこともある。必要なことを臨機応変に拾って広げていくことも必要だが、時間が足りなくなってしまう。 イ：「展開」における教材の魅力を引き出す発問の工夫 ・今後、討論したり議論したりする道徳の内容へ転換されていくのだと思いますが、子どもたちの話し合いをより深めていくための手立てや方策を練っていく必要があると感じた。 ウ：児童生徒の実態の把握 ・当然のことではあるが、実態の把握に用いる「アンケート」は子どもの姿全てを映し出

	すものとはなり得ないため、アンケート結果が全ての基になるような実態把握は今後も避けるべきと考える。 ・ 今回の授業を参観して、一つの授業をするのに、膨大な準備時間がかかる感が否めない。 ○ 発問次第で児童生徒の発言に広がりが見られたが、指導過程上、時間が不足すること。(特に終末部) ○ 「考え、議論する道徳」の授業への転換期であり、その授業を達成すべく手立てや方策等について検討する時間の確保。
--	--

(2) 言語活動の充実を図る指導方法の工夫

【視点】

①道徳科における言語活動の充実

ア：道徳科の授業における言葉

イ：自分の考えを基に書いたり話し合ったりする(表現する)機会の充実

成果	ア：道徳科の授業における言葉 ・学年相応の国語で培った言語能力を使えていたと思います。小学校低学年であれだけの文章を書くことができていたのは、普段の指導力の賜物だと思う。 イ：自分の考えを基に書いたり話し合ったりする(表現する)機会の充実 ・どの授業でもワークシートを用いての言語活動が効果的になされていたと考える。 ・表現する機会については十分に確保されていた。 ・ペア・グループ・全体など形態を変え、取り組ませることで言語活動の充実が図られていた。 ・道徳の時間ほぼ毎時書く活動を取り入れた結果、書くことに抵抗はなくなってきたと思う。書いたことをもとに話し合うまでには至っていない。 ・教師が話しすぎることもなく、時間の確保がきちんとされていた。 ・教材を通して、課題について子ども自身がどう考えたかが見える発言がされていた。 ・グループ等で交流し合うことで、自分の考えがより整理されたり、なかなか思いつかなかった子が他者の意見に共感することで自分の考えを持つことができたりする場面が見られた。 ・自分の考えたことを相手に伝えたり、正確に受け取ったりすることができれば、低学年であっても、教師が中心になりながら話し合いや思考が深まっていく様子を見ることができた。 ・どの授業でも発問や課題に迫ろうと子どもたちがよく取り組んでいた。また、情報コミュニケーションの授業では、普段の話し言葉とネットの世界では異なるということを事象として捉えるだけではなく、実体験としても考えることになり、それが言語活動を高めることにもつながるのではないかと思った。 ・どの授業も、自分の考えを言葉で表現する時間が組み込まれており、うまく表現できていなくても、自分の考えを言葉にしようと努力していた。 ・自分の考えがなかなかもてない児童生徒も、他者の考えから自分の考えへつなげたりすることができていた。 ○ 国語科で培った言語能力を生かし、児童生徒自らの思いや考えを文章化することができていた。 ○ ワークシートを用いたり、様々な学習形態により児童生徒が自分の考えを表出することができた。自分の考えを整理したり、他者に共感したりすることが考えの深まりにつながった。
----	--

ア：道徳科の授業における言葉

- ・国語の読み取りにならないための工夫が今後も重要である。心情マップやウェブ、メーターやロールプレイ等の様々なツールの活用も含めた言語活動や表現の充実を図る必要があるだろう。
- ・国語の授業のように単に教科書の読み取りの授業にならないような配慮が特に難しく感じる。

イ：自分の考えを基に書いたり話し合ったりする(表現する)機会の充実

- ・書く→話す の流れだけが言語活動ではないことを改めて確認。
- ・グループでの活動にはある程度、学習訓練が必要。また、場合によっては教師による軌道修正等も必要。話の進め方やグループの数によっては、全てに目が行き届かなくなってしまう。
- ・決めつけた言葉にならないように注意してはいるが・・・
- ・話し合いの機会を適宜取り入れていて良かったですが、自分の考えや視野を広げるまでは至らなかったことがあった。(発表して終えてしまうことです。) 視野を広げるには、中心発問を大切にされた方がよいと思った。
- ・児童、生徒を活動の中心にするには時間が必要となる。1時間単位の目標の精選が必要
- ・「子どもがどのように考えたら良いかある程度方向性を示せるように、ただしあまり発想を固定化させることのないように」という発問のさじ加減。
- ・自分から上手に発信できない子の、考えや、つぶやきなどを、いかにすくい上げて、授業の中で活用していくか、このあたりが難しく感じる
- ・自分の考えを整理するために言語化することは大事だと思いますが、より話し合いを活発にするためには、きっちりと書く活動というよりも、あいまいな自分の意思を言語化するためとらえることが必要なのではないかと思った。
- ・ゆっくり考え、言葉にする時間を与えてあげたいが、そこで時間を取り過ぎてしまうと時間が足りなくなってしまう。そこが発問の工夫につながっていくのだと思う。研究授業ではタイムマネジメントがしっかりされていたが、自分の中ではいつも課題である。

- 言語活動の充実を図るために、発表したり書いたりすることのほかに、心情マップや即興的な役割演技、表情等で自分の考えを表現する工夫。
- 話し合いの場面を見ることはできたが、発表して終わりということもあった。一方通行型の話し合いではなく、双方向型の話し合いにすること。
- 話し合いの場を、「あいまいな自分の考えを言語化するため」という視点。
- 児童生徒がゆっくり考え、話し合える時間を確保するための発問の工夫や発問の吟味。

②道徳科の授業における「書く活動」「話す活動」の役割とねらい

ア：「書く活動」の役割とねらい

イ：「話す活動」の役割とねらい

成果	ア：「書く活動」の役割とねらい ・3本の授業では「書く」ことによって考えが整理されていく、「話す」ことによって相互の交流がなされ考えが深まるという場面が多く見られた。どの発達段階においても、基本の形として大切にすべきと考える。 ・「書く」ことで自分の考えを整理することができるので、「書く活動」は必要だと感じた。 ・「書く活動」を取り入れることは、自らの考えを深めたり、整理したりするために有効であった。書かせることで記録として残るので、評価の際の参考にもなる。 ・自分の考え明確にするための手立てとなっていた。 ・指導者の発問に対して、児童生徒は自分の考えを書くことができていて良かった。自分の考えを書くことが自分の思いを整理できていたと思う。 イ：「話す活動」の役割とねらい ・話して他者の考えを知ること、自己の考えを深める手助けとなっていた。 ・自分の考えを表現する場、友達の意見を聞く場として有効。 ・全体で意見交流をすることで、考え方の違いを明確にすることができていて良かった。個性と個性のズレを認識できていたと思う。 ○「書く」ことによって、自分の考えが整理され、「話すこと」によって自分の考えを深めることができていた。また、他者と話すことによって生まれるズレは議論する道徳へのきっかけとして作用していた。 ○子どもたちが書いたことを蓄積することによって、評価に生かすことができていた。
課題	ア：「書く活動」の役割とねらい ・国語の力を試す活動にならないよう、最大限の配慮が求められる。（書けなくても話せなくても道徳的諸価値について思考を深めている子どもは少なくない頻度で必ず存在する。いかにそれを想定し、見取っていくか・評価するかが重要な課題であると感じる。） ・書くこと、話すことが苦手な生徒の思いをどうやってくみ取るかが難しく感じる。 イ：「話す活動」の役割とねらい ・話す活動が「書いたことを読むだけ」の場にならないように聞く姿勢も重要であると感じた。 ● 「書くこと」「話すこと」を苦手とする児童生徒への対応の仕方。また、そのような児童生徒への評価。 ● 話し合いの場においては、「話すこと」のほかに、「聞くこと」についても重要視していくこと。

③「書く活動」「話す活動」を生かした指導過程の工夫

成果	・どの授業でもどちらの活動も効果的に取り入れられていた。 ・自分自身の考えを持つための「書く活動」、考えを交流し深めるための「話す活動」の流れはよい。 ・「書く活動」「話す活動」が適切に展開の中に組み入れられていた。 ・意図的に「書く活動」と「話す活動（自分の考えを書かないで。）」を使い分けていて、タイムマネジメントが良かった。 ・書く活動⇒話す活動⇒書く活動という流れで行うことで、最後に自分の考えへの振り返りができていた。 ・全体の中では自分の思いを表現出来ない子も、グループなどの少人数の中では表現できたりする場合があり、授業の中で様々な学習形態が用意されているのは有効だと感じた。 ・「書く活動」については（日頃の授業でも良く取り組んでいるためだと思いますが）子どもたちがよく訓練されており、すばやく取り組めていたので、意見発表や話し合いにスムーズに臨めると思った。 ・話す活動の後に再び書く活動を入れることにより、他者の考えを聞いて変化したり、より考えが明確になったりと深める事ができていた。 ・書くことで自分の考えをまとめ、話し合うことで新たな考えを知ることができていた。 「書く」→“自分の考えを整理する”“どのように考えが変わっていったかの記録” 「話す」→“交流し合うことで、自分自身の考えがより深まったり広がったりする。” 上記の2点が授業のなかで見られた。 ・自分の思いをまとめ、表現する手段として授業中の発言だったり、プリントだったり、自分の思いを表現する手段が複数準備されていることが大切だと感じた ・「書く活動」と「話す活動」は表裏一体となっているが、自分の考えを持った上で話せるということは、子どもたち自身も自信を持って臨めることにもつながっていると思う。 ・川原先生の授業では「タマゴマン」の教材を有効に使い、抽象的な考えについてもしっかり自分の考えをまとめ、話し合いにもよく参加しており、二つの活動はよくリンクしていたと思う。 ・事前に自分の考えを書くことによって、考えが明確になりスムーズに話す活動へ入ることができていた。また、話すことによって自分の考えに自信をもったり、他者の考え方を理解しようとしたりする姿勢がみられた。 ○ 「書く活動」と「話す活動」が適切に「展開部」へ組み込まれていた。「書く活動と」にスムーズに取り組めるようになると、「話す活動」へスムーズにつながっていた。そのためには日頃の指導を大切にしているからこそである。 ○ 「話す活動」によって、児童生徒は自分の考えに自信を持ったり、他者の考え方を理解しようとしたりする姿勢が見られた。
----	--

- ・「個人思考→交流」の流れはパターン化されがちだが、ねらいをはっきりもった上で指導過程へ組み込むことが必要と考える。
- ・限られた時間の中で「話す活動」を充実させるために、「書く活動」をどこにどれだけ取り入れるかをよく考える必要がある。
- ・目的に応じた人数の設定。(ペア、グループ)
書くための時間の確保のためにも、考えをまとめるために必要だと思われる発問に絞って、「書く活動」を取り入れることが重要。
- ・「話す活動」の形態(ペア・全体など)は授業者のねらいを明確にしておくことが必要。
- ・「自己を見つめて→他者を見つめて→振り返る」。この「振り返る」の時間が全体的に少ないと感じた。道徳的実践力(自分の生活に生かせる)まで結びつける振り返りは何かと疑問に思った。
- ・話す活動の幅を広げていき、ワンパターンにならないようにすることが必要。
- ・「書く」行為自体に、個人差が大きい(表現の内容、時間)。書くこと自体が目的ではないので、一コマの中であまり多くの時間をかけるべきではないが、子どもにとって書きやすい内容・発問にする工夫が必要ではないか。
- ・書くこと、話すことが苦手な生徒の思いをどうやってみ取るかが難しく感じる。また、国語の授業のように単に教科書の読み取りの授業にならないような配慮が特に難しく感じる。
- ・「話す活動」では活発に意見を述べていたと思いますが、話し合いをより深く練り合うという意味での「話す活動」にしていく必要があると思った。
- ・指導者の発問に対して、考えや思いを書くことができていたが、一歩先まで考えを書くことができていないことがあった。(なぜそういう風な考えになったのか。)ただ、話すことによって、補足できる力があり驚いた。
- ・自分の考えを時間内にまとめたり、話し合いで発言したりできない児童・生徒への対応
- ・この段階でどのような意図を持って書かせるか(話させるか)が重要と考える。
- ・今後、議論する道徳へ転換するとなると、書く活動と話す活動がより生徒に意識化されることが必要だと思われる。また、そのために中心発問や発問による授業の組み立て方の変化があるとするならば、今後検証をすることもでてくるのではないか。発達段階によっては、「書く」ということ自体が難しい。

- 本時のねらいをはっきりとさせたうえで、「個人思考(書くこと)から交流(話すこと)」の流れを授業のどこに組み入れていくかを考えること。
- ねらいとする道徳的価値に対する自分の考えや思いをまとめたり、今後につないだりする「振り返る」時間の確保。
- 自分の考えを書いたり、話せない児童生徒への対応。

(3) 保護者や地域の方などの支援を得た指導の工夫

【視点】

- ①学習指導過程への位置付け
- ②保護者や地域の方を迎えるための配慮事項
- ③道徳授業の発信と双方向の取組

成果	①学習指導過程への位置付け ②保護者や地域の方を迎えるための配慮事項 ・コスモスデーを活用して、地域の方を道徳の講師として招きました。(低学年のみだったので、詳細はわかりません。申し訳ありません。) ③道徳授業の発信と双方向の取組 ・第二小釣本先生の授業に関わっては、情報モラルについて懇談会などでも取り上げていたということであったので、児童に対しても道徳の時間を活用したアプローチができたことがよかったのではないかと。 ・教育委員会の資料はわかりやすくとてもよかった。保護者に見てもらっても良いと思う。 ・学級通信を通して、道徳の授業の様子を伝えた。授業外での道徳的実践力を発揮したこと(ゴミ拾い等)も掲示した。また、学校の取組として、貴重な経験をしている方を講師として招き、講演会を行った。 ・学級通信に、道徳の授業の感想等について掲載した。 ○ 学級懇談会や学級通信を通じて、学校で行われている道徳科の学習について紹介をすることができた。 ○ 地域の方を道徳の講師として招くことができた。
課題	①学習指導過程への位置付け ・地域の方々を迎えることは児童にとってはとても有効だと思うが、指導過程への位置づけや人材の把握、依頼などはなかなか難しいと感じた。 ・年間計画に入っていないので、保護者や地域の人との関わりを持つことができなかった。 ・授業で行ったことを通信等で紹介するなど日常的に行うことはできるが、教科書を扱いながら地域の人材を活用するというのは、現実的には難しいのではないかと。 ②保護者や地域の方を迎えるための配慮事項 ・道徳の学習においてねらいや意図が重要になることを考えると、外部講師(指導者)としての支援を得るためには綿密な打ち合わせや確認、指導観の共有が必要になる。どのように時間を生み出すか、どのように組織化していくかということがまず大きなハードルとな

	る。(単純な公開であれば参観日などの機会にすすめることも可能だが。) ・今年度は、保護者や地域を巻き込んだ授業は行われなかった。 ③道徳授業の発信と双方向の取組 ・一方的に様子を伝えるだけに終わり、豊かな心を育むために同じ方向を向けたかと言われると、自信をもって「はい。」と言えない。②にも関わるが、貴重な人材を見つける必要があると感じた。 ・必要に応じて積極的に地域へ発信することが大事だと思う。中学校では、これから本格的に授業が展開されていくが、地域の必要な人材などの情報を適切に得られるように整備を進めてほしい。(要望) ・研究授業だから…ということではないが、「こんなことをお話してくれる方がいる」「地域の方をお招きしてこんな授業を行った」などというような情報があれば大変ありがたい。
	● 外部講師となり得る人材のリスト化

(4) その他

・授業の工夫改善と同時に、評価についても研究を深めていきたい。 <u>文字や言葉で表現できているもの</u>を見取ることはできるが、形となって表れないものをどのように見取り、評価していくのか？ この部分をどこまで評価していいのか？ ・道徳の授業の流し方や、教材を一度に読まない、導入はシンプルに等大変勉強になった。道徳の評価方法(文章表記?)には、常にアンテナをはろうと思う。	● 「評価」についての理解を深める研修の必要性。
--	---------------------------------

2 研究推進体制・方法等について

(研究会議、実践発表・「研究のまとめ」発刊による研究成果の還流・発信等)

成果	・市内小中の先生が集まって、校種や学年を超えた研究に取り組めることはとても有意義であると思う。 ・研究授業があるときでも、午後からの会議は参加しやすくてよかった。 ・冬休みにアンケートをまとめて良かったです。また、実践発表も冬休み明けで、時間にゆとりができて良かった。 ・指導案検討をして頂き、自分の道徳に対する知識を広げることができました。ありがとうございました。 ・他校の先生の実践を見ることで、多くを学ぶことができた。 ・それぞれの授業について、かなり突っ込んだ話し合いを行い、道徳の授業を進める上での課題について考えることができた。 ・それぞれの授業で、研究会議以外の先生方の参観もあったのが良かった。
----	--

	・市内の学校の情報を交流することもでき、自校の進捗状況もわかることができたのはとても有意義だった。また、小・中の授業を見ることで、発達段階の違いや、小学校から中学校へつながる部分がわかった。 ○ 授業参観、指導案検討が中心となった研究会であったが、道徳科における情報交換の場にもなった。
課題	・委員の中で終わってしまいがちなので、全体のものにしていく工夫が必要ではないでしょうか。ただ、時数増もあって非常に多忙な中なので負担を増やさず減らしていく方向での取り組みでないと、結局全体のものにはなっていないように思います。（このように意義のある会議でありながら、休憩時間（勤務時間外）に行わなければならない実態からも目を背けてほしくない。道徳のことをいいかげんに考えているのではなく、真剣に向き合う時間と人員が保障されていないことも根本的な問題の一つではないでしょうか。） ・道徳推進教師としては授業の参観や実践発表などためになることばかりだったが、校内でそれをどれだけ還元できているかと言えば、資料の回覧だけになってしまっている。 ・今年初めてこの会議に参加した。滝川市でこのような取り組みをしていることを詳しくはよくわかっていなかった（学校の回覧くらい）。大変勉強になり意義のあることだが、授業者の先生の多忙さは増すばかりと感じた。 ・自校への環流が出来ていない。 ・メンバー以外でせっかく見ていただいた先生方の感想を拾い、活用することができなかった。 ・「研究のまとめ」は研究会議で確認できれば、発表までせずとも、データなどでの交流でもよいのではないか。 ● 時間の確保 ①自校において道徳科について研修を行う時間 ②自校の先生方へ本会議の内容について還流する時間 ③実践発表会の時間

3

その他

各学校における道徳教育の充実に関わって

（「道徳科」の日常実践の充実、家庭や地域との連携、授業公開等について）

成果	・校内研での授業公開、コスモスデーでの授業公開に取り組んでいる。 ・校内での生活指導と道徳の関連も図られており、授業改善や充実に向けた教職員の意識は高まってきていると感じる。 ・年度初めに、研修の中で主に評価について取り扱った。 ・参観日にどの学級も一度は授業を行うこととしている。 ・教頭に道徳の授業を実践していただいた。スムーズな導入、発問の精査、教材の工夫、ワールドカフェ等とても勉強になった。（道徳の授業の流し方が最も勉強になった。）授業研
----	--

	もしていただき、疑問もその日のうちに解決していただいた。 ・年間計画に従って、担任だけではなく、副担任の先生や外部からの講師の先生にも授業を行ってもらっている。 ・研究部で進めている1人1実践の授業として、道徳の授業も積極的に公開してもらうなど、授業をみんなで見合う活動を進めている。 ・中学校ではこれから本格実施となるが、より実践が深まるためにも各校の交流の機会があることで有意義であると思う。 ○ 担任だけではなく管理職や副担任が授業を行った。学級担任が、普段の授業とは異なる角度から児童の新たな一面を見ることができた。評価の改善の観点からも有効であった。 ○ 校内において道徳科の授業を積極的に公開してもらい、授業をみんなで見合う活動を進めることができた。
課題	・家庭や地域との連携は担任に任されており、温度差があるのが現状。 ・評価については多くの教員が不安・疑問を感じている現状があるので、評価に関わる研修検討は喫緊の課題となっている。 ・具体的な評価の文言など、校内である程度の確認が必要。 ・参観日やコスモスデーの年に1回は道徳の授業を公開することになっているが、各自の実践を交流することはできていない。 ・授業公開はなかなかできていないので、計画的に交流をしていきたい。 ・研究会議で話し合われていることと、各学校で道徳について課題となっていることがリンクしていたかどうか。例えば、評価について各学校でどのように検討されているか、授業を進めていく上で何が問題となっているか、など交流する場があっても良かったのではないかな。 ・評価についての研究部からの提案と、話し合いがまだ十分に進んでいない状態である ・日常の実践は担当の先生だけではなく、各校で工夫されていることについても交流できるとよいと思う。また、道徳研の先生方の授業もよいのだが、より多くの先生方の授業を見たり、交流できたりするような開かれた公開になればと思う。 ● 道徳教育研究会議において各学校の道徳科の進捗状況について意見を交換する場の設定。 ● 各校において道徳科の授業について意見交換する場の設定。 ● 道徳科の評価についての共通理解

《参考・引用文献》

- ・ 小学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省
- ・ 中学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省
- ・ 小学校学習指導要領 解説―特別の教科 道徳― 文部科学省
- ・ 中学校学習指導要領 解説―特別の教科 道徳― 文部科学省
- ・ 「道徳教育アーカイブ」 文部科学省
- ・ 平成27年度小・中学校教育課程編成の手引 北海道教育庁学校教育局義務教育課
- ・ 平成28年度小・中学校教育課程編成の手引 北海道教育庁学校教育局義務教育課
- ・ 平成29年度小・中学校教育課程編成の手引 北海道教育庁学校教育局義務教育課
- ・ 平成30年度北海道道徳教育推進会議資料 北海道教育庁学校教育局義務教育課
- ・ 「特別の教科 道徳」の充実に向けて 北海道教育庁学校教育局義務教育課
- ・ 「特別の教科 道徳」の評価について 北海道教育庁学校教育局義務教育課
- ・ 新学習指導要領を踏まえた道徳キーワード 光村図書出版株式会社
- ・ 研究紀要186号 「豊かな心」を育む道徳教育の在り方 空知教育センター
- ・ 研究紀要185号 「豊かな心」を育む道徳教育の在り方 空知教育センター
- ・ 平成22年度滝川市道徳教育推進事業 実践報告書 滝川市教育委員会
- ・ 平成23年度滝川市道徳教育推進事業 実践報告書 滝川市教育委員会
- ・ 平成24年度滝川市道徳教育推進事業 実践報告書 滝川市教育委員会
- ・ 平成25年度滝川市道徳教育推進事業 実践報告書 滝川市教育委員会
- ・ 平成26年度滝川市道徳教育推進事業 実践報告書 滝川市教育委員会
- ・ 平成27年度滝川市道徳教育推進事業 実践報告書 滝川市教育委員会
- ・ 平成28年度滝川市道徳教育推進事業 実践報告書 滝川市教育委員会
- ・ 平成29年度滝川市道徳教育推進事業 実践報告書 滝川市教育委員会
- ・ 情報モラル教育参考教材 滝川市教育委員会



滝川市いじめ根絶シンボルマーク最優秀作品

平成30年度 滝川市道徳教育推進事業 実践報告書

**「自己と他者の心を見つめる道徳科の授業の在り方」
～考え、議論する学習過程を通して～**

発 行 平成31年 3月
 発行者 滝川市教育委員会・滝川市道徳教育研究会議
 所在地 〒073-8686 滝川市大町1丁目2番15号
 滝川市教育委員会 教育総務課
 TEL 0125-28-8042 FAX 0125-24-1024